

I Samuel 25:23-44, 26:1-25, 27:1

(Iサムエル記25:23-24)「アビガイルはダビデを見るやいなや、急いでろばから降り、ダビデの前で顔を伏せて地面にひれ伏した。彼女はダビデの足もとにひれ伏して言った。『ご主人さま。あの罪は私にあるのです。どうか、このはしめが、あなたにじかに申し上げることをお許しください。このはしめのことを聞いてください。』」

丘を回ってダビデはやって来ました。全速力で馬を駆り、怒りで顔をほてらせ、おそらく独り言を言っていたのではないのでしょうか？

「あいつめ、絶対にしとめてやる。私にあのような振る舞いをするとは赦せん！」

そして彼は、道のかなたに、女性がろばに乗ってやってくるのを目にします。すべての食料を見ます。彼の部下たちはお腹がすいています。ダビデはこの美しい女性の前で、自分の一団の部下たちを止まらせます。神さまに油そそがれたダビデは、初めて、自分に善意を持って尽くそうとしている気高い女性に出会います。彼女はダビデの前にひれ伏します。彼女はちりの中に伏して、ダビデに、復讐は自分にしてください、と願います。なぜなら、自分はナバルの妻だからと言うのです。彼女は賢いことをしています。なぜなら、ダビデは彼女のような訴えをする美しい女性に、危害を加える気はないからです！そして彼女は自分の夫が愚か者で嫌な奴であるという事実をわびます。

(Iサムエル記25:25)「『ご主人さま。どうか、あのよこしまな者、ナバルのことなど気にかけないでください。あの人は、その名のとおりの男ですから。その名はナバルで、そのとおりの愚か者です。このはしめの私は、ご主人さまがお遣わしになった若者たちを見ませんでした。』」

「よこしまな者 (man of Belial: ベリヤルの人、つまり悪魔の人、邪悪の化身のような人)」は、無価値な人間です。

(Iサムエル記25:26-28)「『今、ご主人さま。あなたが血を流しに行かれるのをとどめ、ご自分の手を下して復讐なさることをとどめられた【主】は生きておられ、あなたのたましいも生きています。どうか、あなたの敵、ご主人さまに対して害を加えようとする者どもが、ナバルのようになりますように。どうぞ、この女奴隷が、ご主人さまに持ってまいりましたこの贈り物を、ご主人さまにつき従う若者たちにお与えください。どうか、このはしめのそむきの罪をお赦しください。【主】は必ずご主人さまのために、長く続く家をお建てになるでしょう。ご主人さまは【主】の戦いを戦っておられるのですから、一生の間、わざわざはあなたに起こりません。』」

ダビデのキャリアは始まったばかりでした。あとになって彼の生涯には罪が入ってきますが、ここまでの彼の人生は、猟犬の歯のようにきれいなものでした。彼は神さまのために生き、そして神さまを喜ばせようとしています。アビガイルはそのことで彼を賞賛します。

(Iサムエル記25:29)「『たとい、人があなたを追って、あなたのいのちをねらおうとしても、ご主人さまのいのちは、あなたの神、【主】によって、いのちの袋にしまわれており、主はあなたの敵のいのちを石投げのくぼみに入れて投げつけられるでしょう。』」

名指しで呼んではいませんが、アビガイルが話しているのはダビデを追い回しているサウルのことです。そして彼女はダビデについてとてもすごいことを言います。

「ご主人さまのいのちは、あなたの神、【主】によって、いのちの袋にしまわれて」いるということです。

これはまさに、キリスト・イエスにある信者の立場です。ヨハネは、彼の第一の手紙の中で、キリストを「永遠のいのち」と呼んでいます。彼は言います。

(Iヨハネ1:2)「このいのちが現れ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現された永遠のいのちです。」

あなたも私も主を救い主として信じるとき、聖霊さまがバプテスマによって私たちを信者たちの集まりに属する者としてくださいます。パウロは言います。

(Ⅰコリント12:13)「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」

あなたも私も、キリストにある信仰によって、信者たちの集まり、つまりキリストのからだに入れられたのです。私たちはキリストの“うちに”ある者と言われます。そしてキリストにある者が罪に定められることはありません。ですから、私たちはご主イエス・キリストによって、いのちの袋にしまわれているのです。

そしてアビガイルは

「主はあなたの敵のいのち(訳注:英語では souls、つまりたましい)を石投げのくぼみに入れて投げつけられるでしょう」

と言いました。ダビデは石投げのことはよく知っていました。そして彼がゴリヤテにしたことは、イスラエル中によく知られていました。

そしてアビガイルは続けます。

(Ⅰサムエル記25:30-31)「『【主】が、あなたについて約束されたすべての良いことを、ご主人さまに成し遂げ、あなたをイスラエルの君主に任じられたとき、むだに血を流したり、ご主人さま自身で復讐されたりしたことが、あなたのつまずきとなり、ご主人さまの心の妨げとなりませんように。【主】がご主人さまをしあわせにされたなら、このはしめを思い出してください。』」

アビガイルはダビデに

「私の夫がしたことのために、私たちを悪く思いにならないでください。あなたは王になられる方なのでから」

と言っています。私には、自分の馬にまたがって、まさにちりの中に平伏しているこの女性を見下ろしているダビデを思い浮かべることができます。彼女は美しく、気高い女性でした。

(Ⅰサムエル記25:32-33)「ダビデはアビガイルに言った。『きょう、あなたを私に会わせるために送ってくださったイスラエルの神、【主】がほめたたえられますように。あなたの判断が、ほめたたえられるように。また、きょう、私が血を流す罪を犯し、私自身の手で復讐しようとしたのをやめさせたあなたに、誉れがあるように。』」

ダビデは自分があとから後悔するであろう行動をやめさせてくれた、この女性の知恵に感謝していました。

(Ⅰサムエル記25:35)「ダビデはアビガイルの手から彼女が持って来た物を受け取り、彼女に言った。『安心して、あなたの家へ上って行きなさい。ご覧なさい。私はあなたの言うことを聞き、あなたの願いを受け入れた。』」

ダビデは、アビガイルの食料と、アドバイスと、彼女の人格を受け入れました。

(Ⅰサムエル記25:36-38)「アビガイルがナバルのところに帰って来ると、ちょうどナバルは自分の家で、王の宴会のような宴会を開いていた。ナバルが上きげんで、ひどく酔っていたので、アビガイルは明け方まで、何一つ彼に話さなかった。朝になって、ナバルの酔いがさめたとき、妻がこれらの出来事を彼に告げると、彼は気を失って石のようになった。十日ほどたって、【主】がナバルを打たれたので、彼は死んだ。」

ナバルはその夜、盛大なパーティーをひらきました。次の朝、彼は酔いがさめ、アビガイルは前の日に彼女とダビデの間に何が起こったかを彼に話しました。すると「彼は気を失って石のようになった」のです。(訳注:英語の表現は his heart died within him, and he became as a stone つまり、「彼の心臓が彼のうちで死に、彼は石のようになった」)彼は二日酔いで頭が痛っただけでなく、心臓も痛かったのです。彼に何が起こったのでしょうか? 心臓発作でしょうか? 神さまが、このことに介入するようにとアビガイルを動かされたのはよいことです。そうでなければダビデの手は血に染まる場所でした。神さまはそうには望んでおられませんでした。

さて、ダビデはどうするでしょう？パランの砂漠に、美しい未亡人が住んでいます。彼女は実際、ダビデにとって祝福となった唯一の女性です。

(Iサムエル記25:39)「ダビデはナバルが死んだことを聞いて言った。『私がナバルの手から受けたそしりに報復し、このしもべが悪を行うのを引き止めてくださった【主】が、ほめたたえられますように。【主】はナバルの悪を、その頭上に返された。』その後、ダビデは人をやって、アビガイルに自分の妻になるよう申し入れた。」

ナバルが死んだことを聞いたとき、ダビデはアビガイルを自分の妻に迎えたいと願いました。ダビデを道の途中で止めたとき、アビガイルは言いました。

(Iサムエル記25:31)「【主】がご主人さまをしあわせにされたなら、このはしためを思い出してください。」

ダビデは彼女を忘れることはできませんでした。なぜだか分かりますか？彼女はダビデのうちにある最善の部分に訴えたのです。彼女はダビデにアドバイスをし、ダビデには彼女が正しいことが分かりました。彼は自分が彼女を愛していることを知っていました。これは一目ぼれだったと思います。

ダビデはまた、神さまの御手をそこに認めました。神さまは美しい人を用いることがおできになります。あの日、道で彼が彼女の良いアドバイスに感謝したとき、ふたつの偉大なたましいがお互いの前に立ったのです。今、ナバルは死に、ダビデは彼女に自分の妻になってくれるように申し込み、そして彼女はダビデの妻になりました。このときから、ダビデの人生の新しい時期が始まります。

さて、神さまがお認めにならない、ほかのことが起こります。

(Iサムエル記25:43-44)「ダビデはイズレエルの出のアヒノアムをめとっていたので、ふたりともダビデの妻となった。サウルはダビデの妻であった自分の娘ミカルを、ガリムの出のライシュの子パルティに与えていた。」

罪が彼の人生に入ってきました。彼は粗野な人で、粗野な生活をしていましたが、いつか彼は殺人犯になりました。神さまが彼をご自分のみこころにかなった者と呼ばれましたが、それは神さまがダビデの生涯のすべてを承認されたという意味でしょうか？いいえ、違います。これから見て行きますが、ダビデが神さまのためにすばらしい神殿をたてたいと心から願ったとき、神さまは彼に「ノー」と言われなければなりません。神さまは、ダビデの人生の中の罪のゆえに、彼には神殿を建てる許可をお与えになりませんでした。

26章、27章

テーマ:ダビデ、再びサウルの命を助ける。ダビデ、ペリシテ人の地に退く。

ダビデは、ジフの荒野でもう一度サウルのいのちを助けます。サウルとダビデが対照的であることに注目してください。明らかにサウルは、ダビデが神さまに選ばれていることを知っていますが、それでも彼を殺そうとします。ダビデは、サウルが油をそそがれた王であることを認め、彼のいのちを助けます。

ダビデ、再びサウルの命を助ける

(Iサムエル記26:1-2)「ジフ人がギブアにいるサウルのところに来て言った。『ダビデはエシモンの東にあるハキラの丘に隠れているではありませんか。』そこでサウルはすぐ、三千人のイスラエルの精鋭を率い、ジフの荒野にいるダビデを求めてジフの荒野へ下って行った。」

さあまたしてもサウルはダビデを滅ぼそうとして、遠征に出かけます。次のようなことが起こりました。ダビデは荒野に逃げ、サウルが彼を追いかけてきました。ダビデは有能な兵士であり、地形を知っていたので、彼は熟練した戦略家でした。同時に彼には、彼のために喜んで死のうという忠実な部下たちがいました。サウルは地形を知りません。それに加えて、サウルの従者たちはそれほど忠実ではなく、サウルは確かに彼らを疑っていました。

(Iサムエル記26:3b-4)「ダビデはサウルが自分を追って荒野に来たのを見たので、斥候を送り、サウルが確かに来たことを知った。」

サウルが自分の見知らぬ領域に入ってきたとは、ダビデは信じられませんでした。自分の見知らぬ領域に入ることは軍事的には大きなしくじりでしたから、ダビデは本当にサウルがこの地域に入ってきたのかどうかを確かめるために斥候を送りました。彼の斥候は、サウルが確かに荒野にいることを報告しました。

(Iサムエル記26:5)「ダビデは、サウルが陣を敷いている場所へ出て行き、サウルと、その將軍ネルの子アブネルとが寝ている場所を見つけた。サウルは幕営の中で寝ており、兵士たちは、その回りに宿営していた。」

ダビデと彼の部下たちは荒野に隠れていながら、サウルと彼の部下たちがどこにいるかを観察できる位置にいました。

(Iサムエル記26:6-7)「そこで、ダビデは、ヘテ人アヒメレクと、ヨアブの兄弟で、ツエルヤの子アビシャイとに言った。『だれか私といっしょに陣営のサウルのところへ下って行く者はいないか。』するとアビシャイが答えた。『私があなたといっしょに下って行きます。』ダビデとアビシャイは夜、民のところに行った。見ると、サウルは幕営の中で横になって寝ており、彼の槍が、その枕もとの地面に突き刺してあった。アブネルも兵士たちも、その回りに眠っていた。」

ダビデとアビシャイはサウルの陣営に入っていって、まわりを見回しました。サウルは部下に囲まれて、塹壕の中で寝ていました。寝床の枕もとには、地面に彼の槍が刺してありました。

(Iサムエル記26:8)「アビシャイはダビデに言った。『神はきょう、あなたの敵をあなたの手に渡されました。どうぞ私に、あの槍で彼を一気に地に刺し殺させてください。二度することはいりません。』」

アビシャイはダビデに言いました。

「あなたがただ私にそうさせてくださるなら、私は彼を一気に撃ちます。たった一度で十分です。そうすればあなたの敵はいなくなります。」

(Iサムエル記26:9)「しかしダビデはアビシャイに言った。『殺してはならない。【主】に油そそがれた方に手を下して、だれが無罪でおられよう。』」

またしても、ダビデにはサウルを殺すチャンスがあったのに、彼はそれを拒否しました。彼は主に油そそがれた者に対して手を下すつもりはありません。

(Iサムエル記26:10)「ダビデは言った。『【主】は生きておられる。【主】は、必ず彼を打たれる。彼はその生涯の終わりに死ぬか、戦いに下ったときに滅ぼされるかだ。』」

ダビデは「神さまが彼を扱われなければならないのだ」と言います。ダビデは、ヘブル人への手紙10:30に書かれている原則に従って行動しています。

(ヘブル10:30)「…『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする』、また、『主がその民をさばかれる』…」

(Iサムエル記26:11-12)「『私が、【主】に油そそがれた方に手を下すなど、【主】の前に絶対にできないことだ。さあ、今は、あの枕もとにある槍と水差しとを取って行くことにしよう。』こうしてダビデはサウルの枕もとの槍と水差しとを取り、ふたりは立ち去ったが、だれひとりとしてこれを見た者も、気づいた者も、目をさました者もなかった。【主】が彼らを深い眠りに陥れられたので、みな眠りこけていたからである。」

ダビデがしたことは、難しいことではありませんでした。彼はサウルの槍と水差しを取りましたが、誰ひとり目を覚ましませんでした。なぜなら、主がサウルと彼の部下たちを深い眠りに陥れられたからです。

(Iサムエル記26:13)「ダビデは向こう側へ渡って行き、遠く離れた山の頂上に立った。彼らの間には、かなりの隔たりがあった。」

今、ダビデはサウルの陣営から退きましたが、部下たちのところへは戻りませんでした。その代わりにサウルの陣営のずっと向こう側へ渡って行き、山の頂に立ちました。もしだれかが彼を追ってきたなら、簡単に逃げられる場所でした。

(Iサムエル記26:14-17)「そしてダビデは、兵士たちとネルの子アブネルに呼びかけて言った。『アブネル、返事をしろ。』アブネルは答えて言った。『王を呼びつけるおまえはだれだ。』ダビデはアブネルに言った。『おまえは男ではないか。イスラエル中で、おまえに並ぶ者があろうか。おまえはなぜ、自分の主君である王を見張っていなかったのだ。兵士のひとりが、おまえの主君である王を殺しに入り込んだのに。おまえのやったことは良くない。【主】に誓って言うが、おまえたちは死に値する。おまえたちの主君、【主】に油そそがれた方を見張っていなかったからだ。今、王の枕もとにあった王の槍と水差しが、どこにあるか見てみよ。』サウルは、それがダビデの声だとわかって言った。『わが子ダビデよ。これはおまえの声ではないか。』ダビデは答えた。『私の声です。王さま。』

正直言って、サウルの隊長で、サウルを護衛していなければならなかったアブネルに対して、ダビデは皮肉を言っていたのだと私は思います。ダビデはアブネルをあざけります。ダビデはアブネルに、王が殺されていたかも知れないのだと言っています。そのころには王も部下たちも起き出し、何が起こっているのかといぶかります。そこでダビデは言います。

「王の槍と水差しはどこにあるのだ？なくなっているではないか。」

ダビデはおそらくそれらを高くかかげてそう言ったことでしょう。

「見よ。私がここに持っている。私は王を殺すこともできたのだ。だがそうはしなかった。」

そして、それが重要なのです。ダビデは王を殺しはしませんでした。彼はこのすべてのことについて、すばらしい態度でのぞみました。ダビデに関する限り、神さまがこのことを取り扱われるのです。私たちがダビデを批判するのは簡単ですが、今日私たちは神さまに私たちの敵をおゆだねしているのでしょうか？私たちは、自分自身の手で何とかし、私たちを責める者たちに答え、自分たちで物事を取り扱おうとします。神さまは言われます。

「わたしにまかせて、あなたは信仰によって歩みなさい。私を信頼しなさい。」

私たちはこれから、ダビデが主を信頼し、主がときいたってサウルの始末をつけられることを見て行きます。

(Iサムエル記26:25)「サウルはダビデに言った。『わが子ダビデ。おまえに祝福があるように。おまえは多くのことをするだろうが、それはきっと成功しよう。』こうしてダビデは自分の旅を続け、サウルは自分の家へ帰って行った。」

またしてもサウルは自分が間違っていることを認めてダビデを追うことをやめましたが、ダビデはこれがただつかの間の猶予だと言うことを知っていました。

ダビデの心はとても落胆していることが分かります。彼は、この再三の逃亡と地の穴に隠れることに飽き飽きしているのです。

ダビデ、ペリシテ人の地に退く

(Iサムエル記27:1)「ダビデは心の中で言った。『私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるだろう。ペリシテ人の地にのがれるよりほかに道はない。そうすれば、サウルは、私をイスラエルの領土内で、くまなく捜すのをあきらめるであろう。こうして私は彼の手からのがれよう。』」

明らかに、ここでダビデの人生を特徴づける信仰の高嶺から彼が離れてしまっていることが分かります。彼の気が滅入っている時期です。アブラハムにも同じことが起こったことが分かります。イサクにも、ヤコブにも起こりました。事実、ほとんどの神の人は自分たちの人生で、この低迷の時期を経験しているようです。

この章には私たちへのメッセージがあります。もしかしたら、あなたはまさに今日、問題に直面しておられるかも知れません。もしかしたら、長いこと暗い谷間にいて、そこから出て来られるのだろうかと思っておられるかも知れません。自分の問題には解決がないように思えます。もし、これがあなたの慰めになるなら、あなたのほかにも大ぜいの人たちが同じ谷間にいたことがあることを申し上げておきましょう。すっかり踏みならされた、みんなが通る道なのです。このダビデは、あなたや私がそこに行くずっと前にその道を歩みまし

た。その故に、ダビデはずっと、私自身のクリスチャン生活の大きな助けです。私は確かに彼に同情することができます。まるで、彼はこのまま一生涯逃げ回り、ついにはサウルに殺されてしまうかのように見えます。